

青島・連雲港・開封視察旅行

2009/3/24 ~ 29

日中友好経済懇話会第9次視察旅行団

山本正志



連雲港



黄河



ラジルマ工場



<中国・私の問題意識>

今年の10月31日から11月2日に京都で中小商工業研究交流全国集会（主催は全商連・中小商工業研究所）が予定されている。私は京都市会議員をしていたときからこの研究集会に参加してきたが、各地の、そして京都の中小企業にとって中国の経済発展は低コスト商品の流入、生産工場の現地進出、巨大市場の急成長など避けて通れない問題であることが次第にわかってきた。

そんな時、京都大学の西大先生のお誘いで日中友好経済懇話会に加入して年に数回開催される例会で中国進出企業の方や在中国の弁護士さんのお話を聞く機会を得られたが、これまで05年3月に杭州・寧波・紹興地域、08年3月に黄石・武漢・三峡ダム地域の視察ミッションにも参加した。（レポートはホームページに掲載）

いずれも現地政府の説明で開発区の展開・輸出振興・投資受入れに熱心なことに感心させられたが、一方で日本の現地進出企業の苦勞と努力の足跡を知ることができた。

この旅行の少し前「中国貧困絶望工場」（原題「The China Price」アレクサンドラ・ハーニー元フィナンシャルタイムズ記者）を読んだ。中華全国総工会（政府・共産党指導の「労働組合」とは別の選挙で役員が選ばれる新しい労働組合や、ウォルマート、カルフルなど欧米系スーパーが中国国内でどんな工場で安価な商品を生産しているか、違法残業や児童労働、刑務所での生産など消費者からの指摘をうけて（じつは競争相手企業の告発？）監査を強化しているが、そこは中国、いかに監査をすり抜けるかということで専門の会社も繁盛しているという。

インターネット「日経ビジネスON LINE」では「中国は大丈夫か？」がすでに70回を超えて連載されているが、これも「現代中国経済・産業事情」を知る上で参考になる。

昨年9月以降の世界金融危機では中国も大きな影響を受けているが「輸出大国」としても「消費大国」としても「中国はどうか？」という問題はぜひ現地での事情を見て、聞いて知ってお

きたかった。

また、このミッションの構成は大西先生をはじめ研究者、企業家、弁護士など「中国専門家」が多く、食事の間も関心のある話題で交流ができ、新たな人脈もできることもうれしい。

24日

朝7時半に関西空港国際線出発ロビーに集合。橋本団長や大森さん、杉本昭七先生などの顔が見える。今回は木村汎先生ご夫妻は不参加とのこと。（新刊書を執筆中とか）

09:30 関西空港発 11:40 北京空港着（時差1時間）

13:45 北京空港発 15:05 青島空港着

国内線乗り継ぎなのに青島行きの搭乗手続きの厳しいことに驚いた。「バッグの中のコンピュータを出せ」、青島市長への贈り物のクリスタルガラス製の中身を「箱を開いて見せろ」、ベルトの金具は全員が検査器反応でピー！最後には身体検査器でボールペンのペン先にもピー！先日チベットで僧侶たちの違法デモがあったというが、中国国内便の方が厳しいのかもしれない。

ホテルでJETRO（日本貿易振興機構）青島所長の重岡純氏から最近の青島経済の動向についてお聞きする。その後青島市の研究所長が到着、青島市側の歓迎晩餐会となる。きけば、ホテル青島府新大夏は青島市の直轄の高級ホテルで一般客は予約できないとか。

空港から青島の市街地に入ってまず驚いたのはマンション建設ラッシュ。これまで農村地帯であった地区に新しく道路が作られ、道路沿いにマンション建設が続く。それもほとんどすべてが30階建てなど高層マンション。中国のマンションは入居者が買い取った後で壁や仕切りなどから始まって内装をすべて自前で整える。だから買値に加えて相当の費用を準備しなければならない。それでも第2、第3のマンションを買って資産として運用する金持ちもおおいという。いわゆる建設バブルだ。

<青島・韓国企業の夜逃げ>

青島は山東半島の南に位置して、総面積は10,654 km²（約東京都の488倍）、706万人口（周辺の農村人口を含めて）を擁して、都心人口は250万、中国第四位の港町。

JETROの重岡純氏から韓国系企業の「夜逃げ」についての事情をお聞きした。この山東省地域は韓国とも近く朝鮮族は言葉が通じることもあって韓国からの進出企業も多い。その多数はごく小人数の零細企業で、資金繰りや製品出荷など行き詰まると倒産ということになるが、ここは「社会主義」の国、清算手続きで1~2年かかるという。しかも「地方政府支出の補助金を返せ」ということになってくると倒産もさせてもらえない。そこで跡形もなく「夜逃げ」ということになる次第。特に昨年秋の金融基金発生以降は4000社10万人といわれた韓国企業が一挙に激減したという。

25日

<青島進出日本企業・ラジлма>

袋物製造・販売で京都から青島進出している「ラジлма」。流行にあわせたバッグ類を一貫



製造しているが、注目したのは「検品」のきびしさ。最初は仕入れの原料（特殊製布）の表面を

大型のスキャン機で検査、異物が付着してないか調べる。ボタン類も規格にあってないものや不良品は目視で除外。製縫段階でも不良品検査、完成品も製縫や微小金属など（折れた縫い針を新品と交換する際に折れた部分の紛失を許さない）の金属感知検査、最後は出荷の段ボール箱の包装を開いて1個ずつX線検査して再梱包して出荷となる。最後の段階でのX線検査のデータはすべて製造段階での記録が残される。従業員の10%が検査のための業務にあっている。

「不良品が出れば取引停止になる。不良品返還率は0.3%以下」と非常に神経をつかっている。

案内していただいた社長さんの話では「ここで働いている女性たちはほとんどが山東省出身で18~23才くらいまで働いて退職、村に帰って結婚する」という。したがって常に新人を募集し、訓練・研修をしている。給料は実績評価によって段階があり、壁には各個人の点数にわたる評価の円グラフがラインごとに張り出されている。（撮影禁止）「どうすれば評価（給料）が上がるか」もわかるようになっている。とにかくこれだけの小企業でありながら（失礼！）品質管理と人事管理のシステムを構築しているというのは経営者の努力がうかがわれてたくましく思った。

< 中国家電メーカーのナンバーワン：ハイアール（海爾） >

午後は青島ビール工場視察後、中国家電メーカーのハイアールへ。展示場で案内嬢が説明できるのは冷蔵庫と洗濯機を作ってきた歴史だけ、パンフレット類も会社の抱えている課題や戦略などの質問に答える幹部の対応がないので肩すかし。



1984年、中国・青島の2つの赤字企業が合併し、ドイツの先進的な技術を導入、冷蔵庫工場としてスタートしたハイアール。以来、年率80%という驚異的なスピードで成長を続け、いまや中国最大の総合家電メーカー。冷蔵庫の生産台数をみても、日本の全メーカーの合計台数を大きく上回る生産規模を持つ。ハイアールの家電製品の中国国内市場でのシェアは30%でトップ。

案内嬢と議論していてわかったのは「ハイアールは国有企業」ということの意味。つまり国有といっても政府も、青島市政府も1株も所有していない。「集体企業」という形態はハイアールグループが各企業の株を握るが、その株の所有者は企業に働く人々（労働者と経営者）全体のものであり、「誰が株」ということになってはいない。つまり集団が持っている株は集団のものであり、個人には還元されない。「それでは儲けは誰の手に入るのか」「人事権は誰が持っているのか」ということになるが人事権が地方の共産党の意向に反した方向で決められることはありえないだろう。

帰国後、興味深いレポートが見つかった。専修大学社会科学研究所月報 No. 513(2006. 3. 20)「中国電子産業の所有構造改革」専修大学大学院経済学研究科 湯進である。

湯進氏はレポートの中の「海爾集団所有構造の変化」の項で「2000年に海爾集団と持ち株会が发起人として、海爾投資有限公司を設立した（海爾投資と略称）、海爾集団が海爾投資株の1.4%を所有することに対し、持ち株会が同社株の98.6%を所有している」と詳しく株式所有形態の特殊性を解説している。（<http://www.senshu-u.ac.jp/~off1009/PDF/smr513.pdf#search>）

今回の視察では新しく完成した金型センター、テストセンターや様々な実験をするための電磁波試験室、環境試験室、包装安全性試験室などを見ることはできなかつた。残念。

< 浜辺の花嫁 >

夕食まで少し時間があるというので旧租界地域に足をのばすことになった。しかし夏は海水浴場となる海岸は風が強く寒い。しかし「愛は強し！」である。岩場ではウェディングドレスの花嫁とスーツの花婿が並んで記念撮影、しかも夕暮れも近いと言うのにあちこちに。若者たちの間で浜辺での写真は人気の的であり予約もなかなか取れないそうだ。しかも料金は6000元(約9万円)という。もちろんビデオ撮影もあり。



夕食は平議館、北朝鮮政府経営の直営店で外貨獲得目的で営業している。この地域には中国の朝鮮族も住んでいるため客もそういった筋も多いという。ショウは歌姫(兼ウェイトレス)が次々と登場しバックのカラオケで歌い、踊る。彼女らは中国国内に出先として支店を出している政府機関のいわば国家公務員だ。

26日

< 積水化学青島 >

積水化学は、品質的に優位で施工性の高い給水用管材「AGR」を中国市場へ展開しており、製造販売会社を当初合併で設立した。「AGR」というのは、水道用のパイプで積水独自の素材技術により開発した特殊な樹脂を原料としており、耐衝撃性が高く地盤の変化に柔軟に追従し耐震性にも優れている。従来の耐衝撃パイプに比べ、2倍以上の耐衝撃性能を有しており、寒冷地や施工中の衝撃によって受ける衝撃破損事故を防止できる。

「AGR」の優れた接着効果によって、従来の耐衝撃パイプに比べて約4倍の接着性能を発揮することから、水漏れについての信頼性が高い特徴がある。只、价格的には中国品より高価なので、性能を評価してもらって如何に販売に結びつけるかというのが事業のポイントになるという。中国の建築需要は非常に旺盛で、AGRは中国の国内製品に比べると高いので、ターゲットは高級市場になる。また、中国製のパイプは割れて漏水することが多く、漏水率は20%ほどあると言われている。

「一戸一表」とは集合住宅の水道代は均等割負担となっているが、最近の事情では欧米式生活の普及で風呂付住宅が増えてきており「均等負担は不公平」ということになり、各戸に水道メーターを付けようということになった。中国では全国で一戸一表プロジェクトがスタートし、青島では年間10万戸がその対象。このパイプにAGRを採用してもらおうべく活動を開始した。水道局への採用活動を行い、2008年には正式採用され、ビジネスの大きな基礎となった。

< 連運港 >

昼食の後、専用車にて連運港へ(約300km、約4時間)。連運港視察ということであったが着いたのは雲台賓館、これまた地方政府直轄迎賓施設のホテル。別のホテルで連雲港経済技術開発区管理委員会の幹部が最近できたばかりの連雲港紹介の日本語ビデオを上映。連雲港を中国国内だけでなく中央アジア、中・西欧への鉄道輸送の本拠地にしていこうという壮大な計画を進めていることがよくわかる。

27日

<味の素如意食品社>

とにかく品質管理・衛生管理の徹底していることに驚いた。我々視察団が製造現場に入るにあたって 上着・ズボンに衛生着にはきかえる マスクの上に頭部目だしマスク、その上に前部分だけ開いている帽子着用 腕部分の覆い、足には長靴 時計や指輪はずす その上で石鹸で手洗い、薬品槽で 30 秒手を浸して乾燥機で水気をとる 作業場入り口で前面、背面、頭部に粘着ローラーをあてて粉塵の除去。しかもこれが風洞を通過した後もう一回 その上での注意「決して作業台には触れないでください、触れると作業台を再度消毒しなくてはなりません」最後に水質浄化施設を見せていただいたがこちらの市水（水道水）は硬水でそのままでは使えない。そこで海水を真水にかえる逆浸透膜の設備を設置して塩分も大腸菌も取り去ってほぼ純水の段階まで浄化して使っているとのこと。

なぜこれほどのこだわりを？というのには毒入り餃子事件などに端を発した食品事件が続発して「中国は危ない」ということになってしまった。その上でアメリカでも日本でも「製造過程をふくめ情報公開すべきだ」との声に答えることが企業の社会的責任となった。またその企業の姿勢こそが製品価値をたかめることにもなるという。

しかしこの味の素の製品はすべて日本、アメリカ向けで中国国内向けは生産していない。というのは中国では「そこまで品質管理をしなくても」ということで安価な国内企業の食材に人気があるようで「価格の面でとても太刀打ちできません」とのこと。

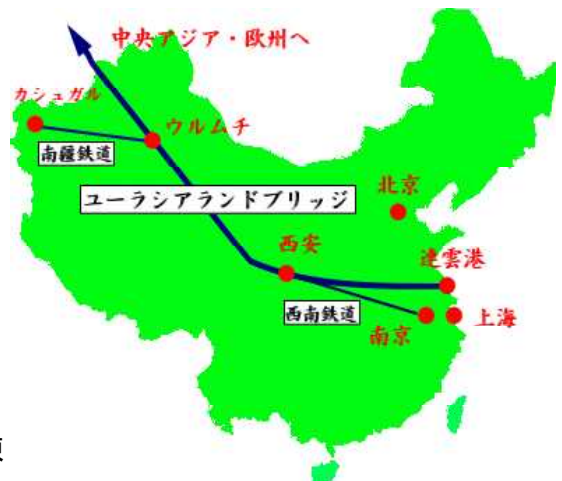
<連雲港港>

午後は連雲港視察へ。まずは連雲港港を紹介する建物で広い床一面のパノラマを見る。その後連雲港港（連雲港が固有の地名）へ。

巨大なクレーンが並びコンテナの積みこみをしていたが、説明では今後さらに拡張の計画もあるという。埠頭に鉄道の終着地点がありユーラシア・ランド・ブリッジの起点である。「モスクワまで 8400 km、13 日で行けます」とのことだが「シベリア鉄道はモスクワまで 15 日、しかも冬期はシベリアは雪で、ウラジオストックは凍結して輸送できません」というので「ちょっと待ってよ。ウラジオストックは元軍港で不凍港ですよ」と一言反論しておいた。

連雲港は、中国沿岸の 10 大港の一つで、2002 年港の貨物取扱量は 3,316 万トンで、コンテナ輸送量は 20.5 万 TEU で、港湾の中に 100 個以上のバースを建設することができ、将来的には、貨物取扱能力を億トンまで増大する予定という。

東の連雲港から西のオランダのロッテルダムまで繋がる全長 10900 km の新ユーラシア・ランドブリッジは、連雲港と中国西部地区、中央アジアとヨーロッパの 30 余りの国を結ぶ。北京 - 上海鉄道線、北京 - 九龍鉄道線、連雲港 - 蘭州鉄道線などを通じて中国各地とつながる。ランド



ブリッジ国際コンテナ専用列車は、すでにユーラシア大陸をつなげる国際大通路となっている。この列車は 48 車両編成で、96TEU コンテナの積載が可能、連雲港を出発すると 25 日でロシアに到着する。

一方のシベリア鉄道、トヨタ自動車は 2009 年春にも、サンクトペテルブルク市の自動車工場への部品輸送でシベリア鉄道の利用を始める。部品を船でウラジオストクに運び、サンクトペテルブルク市までシベリア鉄道で輸送する。輸送期間は 20 日程度の見込み。欧州回りの船舶を使う従来方式だと 60 日程度かかっていた。ロシア・シベリア鉄道の極東区間で続いていた電化工事が 2000 年 12 月に完了。電化の最大の目的はスピードアップ、鉄道省によると一列車による輸送貨物の上限重量も 6,000 トンとこれまでに比べ倍増。現在の関係者の関心事は朝鮮半島の南北縦断鉄道との連結計画だが見通しは立っていない。

6 時 13 分に連雲港駅から列車に乗車、食堂車にて夕食。開封へ夜中 12 時過ぎ到着。

28日

今日は河南大学訪問の前のあき時間を使って宋の時代に首都であった城壁に囲まれた史跡龍亭公園。万寿宮大殿を訪れた。この場所は殷の時代からの史跡が積みかさなっているのではないかとされている。

突然左手の建物で大きな音量での宋の時代の（おそらく）宮廷の儀式の実演が始まった。10 分ほどビデオに取ったが、中国ドラマ（インターネット無料配信）の「三国志演義」や「水滸伝」などでおなじみの皇帝の姿と宮殿内の様子をこの目で見る事ができたことはラッキー！



<河南大学>



11 時河南大学に到着、早速経済学部の許先生をはじめ関係者の挨拶に続き河南大学側から最近の中国・河南経済についての説明を受ける。

「約 1 億人の人口のうち 1000 万人が農民として広東省に出かけ、昨年末の不況で 100 万人が帰ってきている」という。ところがこの 100 万人をどのような形で職を保証するかと言うことでは政府も頭を悩ましているが急なことでありまだ有効で決定的な方向を見出せているわけではないという。

「沿岸部だけでなく内陸部の都市部・農村部でも高層マンションの建設が続いているが引き続き十分な需要があるのか」と言う質問に対しては「現在はノコギリ状態だ。つまり、売り手と買い手が押したり押されたりで、完成とともに完売というようなことはない」との答えだった。この点では中国駐在の方も「上海でもマンションの値段が下がってきており、買い手はもう少し様子を見ようと待っている状態」という。

いくら中国の人口が 13 億人といっても、私たちが見た都市中心部から高速道路沿いに次々と

20階、30階建てのマンション群がこれでもかこれでもか、と建設されている状態は、かつての日本の（そしてアメリカの）土地バブルとその崩壊のことを思えば「中国よおまえもか」とおもえてならない。

河南大学のレストランで食事を（そして白酒 54°も）ご馳走になって午後は黄河と南水北調の橋の現場を視察しようとでかけたのはよかったが、何しろ行ったことのない場所を次々と道端の現地の人に聞きながらバスは進んでいく。カーナビなどあるわけないし時間はどんどん経つし、おまけに道は次第に穴ぼこの田舎道になっていくし。ところが！行く手に黒山の人だかりが。雛祭りの前夜ということで道に人があふれてバスは通れない。おまけにバスが通れる脇道もないという。相談の結果「もう時間もないし引き返そう」と言うことになった。

そこで「食事の前にせめて黄河の流れを見ておこう」ということになりバスで黄河へ。大きな橋を渡りながらやはり黄河の水量は少ない、と感じた。中国ガイドさんの話では、「この橋の欄干の高さまで水が溢れたときは何十万という人が亡くなりました」とのこと。

7時前に鄭州に到着、ホテルは後にして直接レストランへ、今夜は最後の晩餐。あすは北京経由で帰国の途へ。

29日

午前7時過ぎ鄭州空港へ向けて出発。ところが途中の高速道路が警察によって閉鎖されている。ガイドさんの奮闘で「日本の経済視察団が飛行機の時間に遅れる」と交渉した結果通過させてくれた。聞くところによると「政府要人が来ている」とか「黄帝の祭りで混雑するから」とかいうが、本当のところはわからない。北京空港にて昼食。乗り継ぎ 関西空港へ。

最後の昼食、美味しくいただいたがバスの中でも相談になったのは「来年はどこに行くか？」という問題。一案は西安とその近辺、もう一案は新疆ウイグル自治区。西安には何度もいったという人も多く果たして人数が集まるのかといった声もあった。

中国の国家的巨大事業 2008年北京オリンピックと2010年上海万博に向けて西部大開発 4大プロジェクト

- (1)南水北調...南の水を北へ(3本の運河を北へ)
- (2)西電東送...西の電気を東へ(三峡ダムほか)
- (3)西気東輸...新疆の天然ガスを上海へ(4167 km)
- (4)青蔵鉄路...ゴルムド - ラサ間(1118km)の鉄道

労働者確保難と最低賃金標準 中国で最低賃金の引き上げが相次いでいる。上海市など多くの外資企業が集中する沿岸部を中心に昨年比で10%~20%の上昇となっている。賃金の上昇は消費者の購買力を底上げするなどプラスの効果大きい反面、原材料の高騰や人民元高などが重なって、企業に対する負担を重くしている。青島市でも外資系企業の進出ラッシュ、「民工荒」と呼ばれる一般ワーカーの労働力不足が顕在化しつつある。特に食品、繊維企業のような労働集約型の業種には影響が出ている。

労働条件（賃金水準のほか、職場のエアコン完備の有無、宿舍の有無）を比較してよりよい待遇を求めて安易に転職するのが現代中国の若者気質という。

参考 主要都市の最低賃金改定動向

省市名	改定年月日	最低賃金額	最低賃金以外に別途負担
深セン市（特区内）	2008年7月1日	850元 1000元	
北京市	2008年7月1日	730元 800元	社保料+住宅積立金の個人負担分
大連市	2007年12月20日	650元 700元	
上海市	2008年4月1日	840元 960元	社保料+住宅積立金の個人負担分
青島市 7区	2008年1月1日	610元 760元	
5市	2008年1月1日	540元 620元	

JETRO 青島事務所提供

「The China Price」(アレクサンドラ・ハーニー「中国貧困絶望工」)の内容から
 (日経ビジネス <http://news.goo.ne.jp/article/nbonline/business/nbonline-179660-01.html>)

「本書の目的は、中国の圧倒的な競争力の源泉である生産コストの本当の姿を明らかにすることにある。チャイナ・プライスの陰に隠れている人々とは？ それほど安価に生産できる方法とは？ その人々が払う代償は何か？ 我々が払う犠牲は何なのか？ そして、いつまでこのようなことが可能なのか？」

本書にはこれまで公表されることになかった中国の生産現場の実態がレポートされている。



- ・ウォルマートは消費者から厳しい「奴隷労働・児童労働禁止」の指摘によって工場現場の立ち入り監査を強化しているが、隠れた「第二工場」では相変わらず悪条件での生産が続いている。「中国で労働法を守っていたらビジネスなんてとても長続きしないよ」(現地経営者)
- ・換気設備のない民間炭鉱で働く労働者は保険もなく、安全装置も装備せず、事故も日常茶飯事というが、労働者は「違法な炭鉱でもここで働くしかないんだよ」

深センの台湾人工場長が嘆く。

「10年前、この工場に来た労働者が開口一番に聞く質問は『残業できるか？』であった。その答えがイエスなら、彼らはここで働きたいと言った。だが、今の労働者は違う。『残業があるのか？』と聞くので、そうだと答えると、彼らは『それなら、ここは嫌だ』と去っていく。賃金を37パーセントも増やしたのに、彼らはエアコン完備の工場の方に流れていってしまうのだ」

<垣間見た中国>



かわいい三輪自動車



市民の足・電動バイク



開封の万寿宮大殿



早朝の朝市・何でもあり！